入試形態の違いによる入学生の学習意欲について

Relationships between Route of College Admission and Willingness to Learn

吉澤 隆志¹⁾ 鈴木 智裕¹⁾

TAKASHI YOSHIZAWA, RPT, PhD¹⁾, TOMOHIRO SUZUKI, RPT, MS¹⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, Yachiyo Rehabilitation College: 11-1-30 Yachiyodaikita, Yachiyo-shi, Chiba 276-0031, Japan
TEL+81 47-481-7320 FAX +81 47-481-7321 E-mail: t.yoshizawa@yachiyo-reha.jp

Rigakuryoho Kagaku 31(2): 265–268, 2016. Submitted Oct. 1, 2015. Accepted Nov. 17, 2015.

ABSTRACT: [Purpose] To investigate the relationship between students' willingness to learn and their route of college admission. [Subjects] Eighty-eight first-year students of a vocational physical therapy college. [Methods] Students college admission routes were divided into admissions office, high school recommendation, adult entry, and general routes of entry. Following admission, a questionnaire about willingness to learn was conducted, and its relationship with the route of admission was investigated using the Kruskal-Wallis test. [Results] The mental health and interpersonal skills items of the willingness to learn questionnaire of adult entry students were significantly higher than those of the high school recommendation students. [Conclusion] According to the results of this study, it should be possible to provide guidance to students at an early stage, based on route of admission and willingness to learn.

Key words: type of admission, mental health, interpersonal skills

要旨:〔目的〕入試形態の違いによる、入学生の学習意欲の関係について調べることにした。〔対象〕某A専門学校理学療法学科学生1年生88名とした。〔方法〕入試形態は、AO入試、高校推薦入試、社会人入試、一般入試の4つに分類した。また、入学後に対象に対し、学習意欲に関するアンケートを実施した。次に、入試形態ごとの入学生の学習意欲の関係について、Kruskal-Wallis検定にて調べた。〔結果〕学習意欲のうち、精神的健康度と対人関係スキルについては、社会人入試での入学生の方が高校推薦入試での入学生よりも有意に高かった。〔結語〕本研究の結果により、入試形態と学習意欲を基にした早期よりの学生指導が可能になると考える。

キーワード: 入試形態、精神的健康度、対人関係スキル

¹⁾ 八千代リハビリテーション学院 理学療法学科:千葉県八千代市八千代台北11-1-30 (〒276-0031) TEL 047-481-7320 FAX 047-481-7321

I. はじめに

現在、入試の形態としては、Admissions Office 入試（以下、AO 入試）、高校推薦入試、社会人入試、一般入試などが挙げられる¹⁻³⁾。AO 入試は、平成2年度に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでの導入に始まり、その後急速な広がりを見せた⁴⁾。AO 入試での選抜方法としては、学科試験を課されないことがほとんどであり⁵⁾、自己推薦書・小論文・面接などにより受験生の個性や学ぶ意欲を判断することを大きな目的とする¹⁾。また、高校推薦入試や社会人入試についても、一般的には意欲が高い受験生を入学させることを目的として実施されるものである^{2,3)}。高校推薦入試は、在籍する高等学校の学校長の推薦を受けた受験生を選抜するものであり、学科試験が課されない場合が多い。また、社会人入試は、高等学校を卒業または高等学校卒業と同等以上の学力を有すると認められた受験生などを選抜するものであり、高校推薦入試と同様に学科試験が課されない場合が多い。

近年、少子化や進学率の上昇および養成校の増加などに伴い、学生の学習意欲の低下が指摘されている⁶⁾。学習意欲は学習の原動力および推進力であり、学ぶことに対し前向きな動機を与えるものである⁷⁾。一方、学習意欲の低下は、定期試験成績（以下、成績）の伸び悩みや進路選択の遅延などといった悪影響を及ぼすと考えられる^{8,9)}。

学習意欲の大きな要素として、内発的動機づけと外発的動機づけがある¹⁰⁾。内発的動機づけとは“勉強することが楽しい”・“人との競争のためではなく自分自身を高めたい”、外発的動機づけとは“高い給料を貰いたい”・“社会的に認められるようになりたい”などといったものである。他に、学習意欲を支える要因として、精神的健康度、対人関係スキル、学校への適応度が挙げられる^{11,12)}。精神的健康度とは“自信をもって自分の考えをいえる”・“自信がない方である”、対人関係スキルとは“他人が話しているところに気軽に参加できる”・“気まずいことがあった相手と上手に和解できる”、学校への適応度とは“在籍している学校に満足している”・“学校生活で充実感や満足感を覚えることがある”、などといったものである。

教員としては、各個人に対し適切な指導や援助を行うために、早期に学生の学習意欲を把握する必要がある。そのため、入試形態と学習意欲との関係を検討することは意義があると考え、先行研究として、山岸⁴⁾は、AO 入試入学生は一般入試入学生よりも勉強意欲が高いと述べている。一方、高校推薦入試や社会人入試入学生の学習意欲の関係を調べた研究は見当たらない。また、これまで AO 入試と高校推薦入試や社会人入試入学生の学習意欲の違いについて調べた研究はほとんどない。よって、本研究の目的は、入試形態の違いによる入学生の学

習意欲の関係について調べることである。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は、某 A 専門学校理学療法学科学生1年生 88 名（平均年齢 22.2 ± 6.5 歳）とした。事前に、研究への参加・不参加が成績へ影響しない旨、研究趣旨、アンケート内容、アンケート記載内容が成績と関係ない旨、結果の処理方法などについて十分な説明を行い、その後、同意書に署名をした者についてのみ研究対象とした。

また、本研究は、八千代リハビリテーション学院の運営会議（倫理委員会を兼ねる）の承認を得た上で実施した。

2. 方法

入試形態は、AO 入試（24 名）、高校推薦入試（39 名）、社会人入試（13 名）、一般入試（21 名）の4つに分類した。高校推薦入試は高校3年生のみが受験可能、社会人入試は社会人および大学4年生が受験可能。AO 入試と一般入試は、どの年代でも受験可能である。

入学後（6 月）に対象に対し、学習意欲に関するアンケートを実施した。アンケート内容は、学習意欲と規定した5項目（内発的動機づけ・外発的動機づけ・精神的健康度・対人関係スキル・学校への適応度）についてのものとした。また、アンケート項目については、既存の尺度を合計した102の設問とした。用いた既存尺度としては、内発的動機づけと外発的動機づけは「達成動機測定尺度（23 項目）（内発的動機づけに関する質問は13 項目、外発的動機づけに関する質問は10 項目）」、精神的健康度は「無力感尺度（41 項目）」、対人関係スキルは「KISS-18（18 項目）」、学校への適応度は「学校生活満足度尺度（20 項目）」とした。なお、全ての既存尺度について、信頼性および妥当性は認められている。アンケートは、5 件法にて聴取し、得点化を行った。なお、本来「無力感尺度」については、得点が高いほど無力感が高いということとなる。しかし、集計の際に得点を反転させることにより、本研究においては得点が高いほど無力感が低いと読み替えることとした。

次に、入試形態の違いによる入学生の学習意欲の関係について、Kruskal-Wallis 検定にて調べた。なお、解析には統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics V22.0（日本 IMB 社製）を使用し、有意水準は5%とした。

III. 結果

アンケートの回収率は、88%であった。

学習意欲アンケートごとの最高点－最低点は、内発的動機づけ 65 点－13 点、外発的動機づけ 50 点－10 点、精神的健康度 205 点－41 点、対人関係スキル 90 点－18

点、学校への適応度 100 点 - 20 点となる (表 1)。得点が高いほど、好ましい結果となる。

対象全体のアンケートの結果としては、内発的動機づけ 50.2 ± 8.0 点、外発的動機づけ 33.1 ± 6.5 点、精神的健康度 117.7 ± 24.0 点、対人関係スキル 56.3 ± 11.1 点、学校への適応度 68.4 ± 11.2 点であった (いずれも平均 $\pm$ 標準偏差)。

入試形態ごとのアンケートの結果を、表 2 に示す。学習意欲のうち、精神的健康度と対人関係スキルについては、社会人入試での入学生の方が高校推薦入試での入学生よりも有意に高かった ($p < 0.05$) (表 2)。その他、入試形態の違いと学習意欲との関係に有意差は見られなかった (表 2)。

IV. 考 察

本研究では、入試形態の違いによる入学生の学習意欲の関係について調べた。結果として、先行研究にあるような、AO 入試と一般入試での入学生について学習意欲に関して違いが見られなかった。理由としては、山岸⁴⁾は、質問紙調査の結果や教員の主観的な意見を採用しており、本研究のようにアンケートを実施し得点化した訳ではなかったことが考えられる。また、他の結果として、高校推薦入試と社会人入試での入学生について、いくつかの学習意欲に有意差が見られた。なお、AO 入試と一般入試はどの年代でも受験可能なため、入学生の割合が高校生にも社会人にも偏らず、学習意欲に有意差が見られなかったと考える。

社会人入試での入学生のほとんど (約 90%) は、高校や大学を卒業後、社会人として社会という開かれた世

界で働いてきた者たちである。社会人は、社会の中で働くことにおいて様々な精神的な苦痛や困難に直面することが想像される。しかし、就労上の困難があったとしても、社会においては周囲の援助が得られることが一般的である¹³⁾。そのため、精神的に辛い状況にあったとしても、解決に向かいやすい環境にあるといえる。また、万が一、就労を行う上で問題が解決されずに行き詰ってしまった場合において、転職するという手段をとることが比較的行いやすいと考えられる¹⁴⁾。森本¹⁵⁾は、勤労者の職場ストレスに対するコーピングの特徴について、課題ストレス (職務内容など) と対人ストレス (同僚との不和など) に共通して問題焦点型コーピング (ストレス状況の改善に向けて努力する) と回避型コーピング (ストレス状況からの逃避・回避を行う) を組み合わせるタイプがあると述べている。また、特に課題ストレスにおいては回避型コーピングを用いることが多いとも述べている。よって、転職がストレスに対する逃避行動となり、精神的健康度の低下を防がれ易いと考える。また、一般的な職場は年代的に幅のある人員で構成される。もちろん、上司と部下という形で年齢差が生じる場合もあるが、同僚であったとしても年代の幅が存在する可能性がある。その場合、年代が異なる上司や部下または同僚とコミュニケーションをとる必要性が生じる。コミュニケーションとは、言語および非言語による情報の相互伝達行為である¹⁶⁾。職場内でのコミュニケーションを難しくする要素として、各個人の立場の違いや価値観の相違などが挙げられる¹⁷⁾。よって、社会人たちは職場内において、上司への礼儀・報連相・傾聴・他者の価値観の受容などを考慮しコミュニケーションをとることが重要となる。そのような状況の中で、対人関係スキルの向上が見られたと考える。

一方、高校推薦入試での入学生は、高等学校に通っていた生徒たちである。高等学校は、社会に比べると閉じられた世界と考えることができる。具体的には、高等学校では生徒は特定の数名のグループで活動することが多くなると共に、保護者や教諭などの目が届きにくくなってしまいう部分がある。その場合、高等学校で過ごす上で何らかの問題が生じた場合に、解決に向かうことが難しくなってしまうことがあると考えられる。富

表 1 学習意欲アンケートの最高点と最低点

	最高点	最低点
内発的動機づけ (点)	65	13
外発的動機づけ (点)	50	10
精神的健康度 (点)	205	41
対人関係スキル (点)	90	18
学校への適応度 (点)	100	20

表 2 入試形態ごとの学習意欲アンケート結果

	内発的動機づけ	外発的動機づけ	精神的健康度	対人関係スキル	学校への適応度
AO 入試 (点)	51.3 ± 6.5	33.9 ± 8.1	116.6 ± 25.9	57.5 ± 11.3	68.9 ± 12.5
高校推薦入試 (点)	48.2 ± 8.8	32.8 ± 6.8	110.3 ± 22.2	52.2 ± 10.4	65.7 ± 11.0
社会人入試 (点)	52.2 ± 7.7	31.8 ± 3.6	132.9 ± 23.1	62.6 ± 10.5	73.3 ± 9.9
一般入試 (点)	51.0 ± 8.1	33.0 ± 5.8	121.0 ± 22.5	58.0 ± 10.9	69.2 ± 11.0

平均 $\pm$ 標準偏差. *: $p < 0.05$.

田¹⁸⁾は、いじめの多くが、むしろ比較的親密と思われる仲間関係のうちで起きていると述べている。他に、徳永¹⁹⁾は、社会人に比べて高校生は精神的健康度が低く、その傾向は高学年になるほど顕著になると述べている。よって、高校生は精神的健康度が低くなり易い状況にあると考える。また、必然的に同年代との関わりが多くなる中で、対人関係スキルは向上しにくい環境にあると考える。

これらのことを考慮した場合、高校推薦入試での入学生に対しては、早期より教員による面談を行い特に精神的な悩みを聴取し、改善に努めることが重要であると考え。また、グループ活動などで積極的に世代が異なる学生たちとの交流を促すことが有用であると考え。このような対応を重ねることで、精神的健康度や対人関係スキルの改善に繋がると考えられる。社会人入試での入学生については、精神的健康度も対人関係スキルも高いことからクラスの牽引役としての役割を担ってもらうことが望ましいと考える。本人と相談の上、可能であればリーダーやサブリーダーとしてクラス運営や教員との調整を行ってもらうことが好ましいと考える。またグループ活動により、高校推薦入試での入学生に対し積極的に関わる機会を増やしていくことが望ましいと考える。

教員として、学生の学習意欲を早期に把握することは重要である。理由としては、学習意欲が低い学生に早期からの指導や援助が可能となるためである。本研究の結果により、入試形態と学習意欲を基にした早期よりの学生指導が可能になると考える。今後の検討課題として、高校推薦入試や社会人入試での入学生の学習意欲の変化を経時的に調査していきたい。また、本研究の限界として、入試形態ごとの対象者数に違いがあることが挙げられる。このことについても、今後の課題としたいと考える。

引用文献

- 1) 坪井ひろみ：AO入試実施状況に関する報告。秋田大学工学資源学部研究報告，2006，27：31-34。
- 2) 千葉県立保健医療大学：募集要項（推薦入学）。<http://www.pref.chiba.lg.jp/hoidai/kyouiku/nyuushi/suisennyugaku.html>（閲覧日2014年7月11日）。
- 3) 秋田大学：アドミッションポリシー（保健学科）。<http://www.med.akita-u.ac.jp/selection/hs/admission-hoken.html>（閲覧日2014年7月10日）。
- 4) 山岸みどり：北海道大学AO入試の現況。物理教育，2002，50(5)：309-312。
- 5) 大作 勝：国立大学のAO入試は学生の学力低下につながるか。リメディアル教育研究，2008，3(2)：148-153。
- 6) 石井秀宗，椎名久美子，前田忠彦・他：大学教員における学生の学力低下意識に影響する諸要因についての検討。行動計量学，2007，37(1)：67-77。
- 7) 長瀬莊一：関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価。明治図書，東京，2003，pp44-50。
- 8) 吉澤隆志，松永秀俊，藤沢しげ子：学習意欲が定期試験成績向上に及ぼす効果について。理学療法科学，2009，24(3)：463-466。
- 9) 下山晴彦：男子大学生の無気力の研究。教育心理学研究，1995，43(2)：145-155。
- 10) 松田浩平，佐藤恵美：文京学院大学生における学習への動機づけと試験成績の原因帰属。文京学院大学研究紀要，2004，6(1)：149-166。
- 11) 北尾倫彦：学習指導の心理学。有斐閣，東京，1993，pp160-162。
- 12) 下山 剛：学習意欲の見方・導き方。教育出版，東京，2000，pp24-27。
- 13) 日経キャリア教育.net：状況把握力。<http://career-edu.nikkeihr.co.jp/contents/all/societygym/11.html>（閲覧日2015年7月2日）。
- 14) 精神的ストレスと疲労解消法。<http://fatigue.hajime888.com/f028.html>（閲覧日2015年11月8日）。
- 15) 森本浩志：勤労者におけるコーピングパターンおよびコーピングの選択理由とストレス反応の関連。広島国際大学心理科学部紀要，2014，1：3-13。
- 16) 綿森淑子，竹内愛子，福迫陽子・他：実用コミュニケーション能力検査の開発と標準化。リハビリテーション医学，1987，24(2)：103-112。
- 17) 石田秀朗：職場活性化を促す社員間コミュニケーションの研究—コミュニケーション機会の創出手法に焦点を当てて—。奈良文化女子短期大学紀要，2013，44：1-14。
- 18) 富田充保：子ども・青年の人間関係の特質といじめにおける仲間関係：近年の「いじめ問題」を中心に。教育科学研究，1996，15：1-16。
- 19) 徳永幹雄，橋本公雄：健康度・生活習慣の年代的差異及び授業前後での変化。健康科学，2002，24：57-67。